

# 「日本人街」から「東洋街」へ変貌する サンパウロのリベルダーデ地区

もり こういち  
森 幸一  
サンパウロ大学  
哲学・文学・人間科学部教授



もり こういち ● 明治大学大学院修了後（社会人類学専攻）、日系社会・文化研究のためにサンパウロ大学留学。カンピーナス州立大学を経て、サンパウロ人文科学研究所研究員および所長。大阪大学グローバルCOEプログラム連携研究員、琉球大学移民研究センター客員研究員でもある

## 20世紀前半の移民に始まる エスニシティによる棲み分け

19世紀後半、人口わずか2万人程度の寂しい田舎町に過ぎなかったサンパウロ市では、コーヒー産業の隆盛とともに、1920年代からそこで蓄積された資本を利用して工業化が展開され、30年代半ばにその人口は100万人を超えるにいたった。この人口増加は、主に19世紀後半から本格的に移住するようになったヨーロッパ諸国からの移民がコーヒー農園で賃金労働者として生活を送ったのちに、工場労働力として吸収されて起きたものである。

1934年当時、サンパウロ市の人口は103万3000人ほど。そのうち外国人が約29万人（28%）で、その

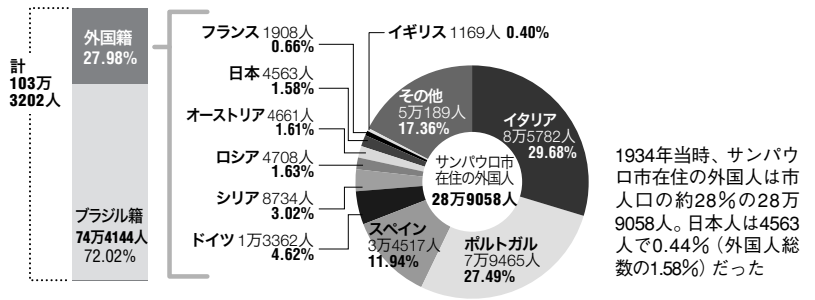
外国人総数の68%にあたる約20万人がラテン系3国（イタリア、ポルトガル、スペイン）からの移民（全体に対して19%）、そしてドイツ人が1万3000人程度（同1.3%）であった（図1）。

この当時のサンパウロ市を大雑把に捉えると、商業地区は市の中心であるセー地区、工業地区は市の東側のブラス、モッカ、ベレン地区など。この工業地帯で働く工場労働者らの住宅地区はブラス、ビシーガ、カンブシーといった工場地帯隣接地域、コーヒー農園主や事業家などの上流階級居住地区はベラ・ビスタやリベルダーデ地区の一角、イジエノーポリス地区、現在のパウリスタ大通りにかけての地域。このあたりまでが市街地で、その周辺には

リベルダーデの東洋街の誕生を記念した仮装パレード（1974年11月）。翌年2月の地下鉄リベルダーデ駅開設に先立ち、東洋街では街頭装飾がなされ、日本庭園、大鳥居やスズラン灯、巴模様のタイルなどが建造された

資料：ディスカバー・ニッケイ（www.discovernikkei.org）、根川幸男「ブラジルの日本人街」より

図1 1934年当時のサンパウロ市在住外国人人口と比率 (国名は国籍)



広大な半市街地 (主に小規模農業が行なわれていた) が広がっていた。

当時、29万人ほどだった外国人移民は、例えばイタリア人たちはブラス、モッカ、ビシーガ地区などの工業地帯とそれに隣接する居住区に、ユダヤ人たちはボン・レチーロ地区、日本人はリベルダーデ地区などへ集中していたように、かなりの程度、エスニシティによる棲み分け傾向が認められた。

こうした傾向は、ニューカマーズである韓国系、中国系、ポルビア系などを含めた各エスニック集団が特定の職種に集中するという特徴をある程度伴いながら、現在にまでいたっている。例えば、ボン・レチーロ地区はオールドカマーズであるユダヤ人たちが集中し、そこで縫製業を中心とする仕事に就き、社会経済上昇を目指した結果、別の居住地区に移動を遂げるようになった時期に、ニューカマーズである韓国移民が居住を開始し、やはりニューカマーズであったポルビア移民を労働力としながら縫製業で成功を目指してきたという特徴を持っている。

商店が集まり、学校ができ、「日本人街」が生まれた

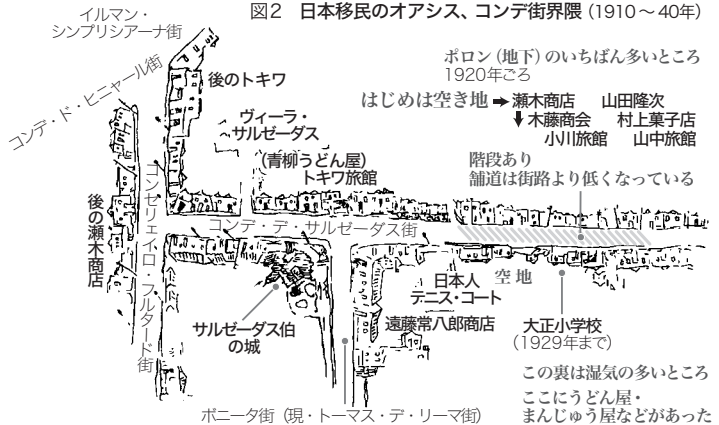
サンパウロ市における日本人の歴史

は、1908年の第1回移民以前にさかのぼることができるが、これを除くとそのプレゼンスを拡大させてきたのは10年代後半からである。34年当時、市の日本人人口は4563人で、その23%がリベルダーデ地区に集中していたが、半市街地であった地域 (モルンビー、ツクルビーなど) にも居住し、近郊型農業に従事する者も多かった。

リベルダーデ地区では、セー広場 (大聖堂) に近いコンデ・デ・サルゼーダス街 (以下コンデ街と略す) を中心にしながら、エスツダントス、タバチンゲラ、グロリア、サンパウロといった

「9月7日広場」付近のリベルダーデ通り。1942年  
資料：サンパウロ市文化局歴史遺産課刊「dadernos do igepac-sp 2 Liberdade」より

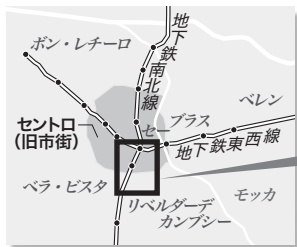
図2 日本移民のオアシス、コンデ街界隈 (1910~40年)



各街路に囲まれた地域に集中的に居住し、特にコンデ街を中心に戦前期の日本人街が形成された。

この地区に日本人が集中しはじめたのには、いくつかの理由があった。第一には市の中心であったセー広場に近く、仕事場への交通アクセスがよかったこと、第二には急坂に位置するコンデ街

図3 サンパウロ  
リベルダーデ地区「東洋街」



リベルダーデ地区はサンパウロ市の中心に位置するセー広場のほぼ南側にある。現在、東洋街は、古くからの日本人街だったコンデ・デ・サルゼーダス街から南へ向けて1.5キロほどの広がりを持つ

に安価な半地下部屋ポロンが数多くあったこと、第三には日本帝国総領事館が15年にセー広場に開設されたのを嚆矢として、日本の出先機関や公共性の高い事業所がセー広場付近に集中するようになったことなどが挙げられる。

コンデ街を中心とする戦前の日本人街は、10年代初頭から、日本製品・雑貨・食料品を扱う商店、下宿屋・旅館・ホテルの宿泊所、医院、理髪店、洋服店、薬局、飲食店、菓子製造業、豆腐製造業、醤油醸造所、書籍店などが続々と開業し、さらに市内で最初の

日本語学校「大正小学校」も開校され（1915年）、発展を遂げていった（図2）。この日本人街の全盛期は20年代末から30年代末にかけてのことであった。しかしながら、41年に第二次世界大戦が勃発し、翌42年9月にはコンデ街およびエスツダンテス街からの日本人強制退命令が下されるとともに、会社組織で営業していた商店などが財産没収の対象となり、戦前は日本移民の「オアシス」として日本への郷愁を癒した日本人街も衰退していった。

**新日本人街は  
新たなエスニツク文化創造の場**

戦前から起きていた日本（系）人のサンパウロ市への移動は、永住主義の台頭や子弟教育の必要などを理由に、戦後、活発化した。39年当時の日系人口は約5000人であったが、58年には約7万人へと急増、さらに88年には35万を超える日系人が居住するにいたっている。日系人のサンパウロ市への移動とそこでの経済的安定・上昇、そして戦後移住の再開（53年）は、ガルボン・ブエノ街を中心とする新日本人街の形成と展開の基底的な条件であった。

終戦後、コンデ街へ戻った商店や料理店などもあったものの、その多くは

急坂というコンデ街での商業活動のハズレもあり、同じリベルダーデ地区内に位置するガルボン・ブエノ街を中心とする街路を選択し、そこに商店、料理店、事業所などを構えていった（図3）。特にこの街路を中心とする新日本人街の成立と発展にとって大きな契機となったのは、53年7月、映画館、ホテル、レストランなどの施設を持つシネ・ニテロイが開館したことであった。50年代後半には新日本人街の日系商店や料理店などが旧日本人街を数的に凌駕するにいたり、その後、複数の日本映画上映館、日系旅行社などの各種エスニツク企業が誕生した。

また、この時期には戦前のナシヨナリズム下で解体を余儀なくされた日系団体がサンパウロ日本文化協会（現在のブラジル日本文化福祉協会、55年結成）や県人会などを筆頭に新たに結成されはじめ、多くが本部をガルボン・ブエノ街やその周辺に置くようになり、リベルダーデはエスニツク日本人地区の様相を明確にしていった。

60年代には、リベルダーデ地区で営業する日系商店・事業所がリベルダーデ商店親睦会（65年結成。以下ACALと略す）を結成し、日系人を中心とす



東洋街を代表する催しの一つ、七夕祭りで街頭に揚げられた飾り。移民船「笠戸丸」をモチーフにしたもの  
写真提供：筆者（以下も同じ）

る顧客をひきつけるために、当該地区にあつた他の日系団体（例えば伯国仏教連合会、宮城県人会等）とともに、エスニック・イベント（Festa）を創造しはじめた。その嚆矢は69年に始まった「東洋祭り」であり、新日本人街は商

業主義と結びついたエスニック文化のマニフェステーションの空間ともなっていた。

### 「日本」をシンボルに進められた「東洋街」化の施策

68年、ガルボン・ブエノ街を中心とする日本人街に大きな転機が訪れた。それは市の東西を結ぶ幹線道路（Eduardo Costa e Silva）と地下鉄南北線（およびリベルダーデ駅）の建設であった。特に後者は70年代になって、日系商店や事業所などの商業主義が、観光政策を中核とするサンパウロ市役所の市中心地区再活性化政策とも連動し、リベルダーデ地区の「東洋街」化を促進させていった。

この政策はロサンゼルスのリトル・トーキョーをモデルとして、リベルダーデ地区をジャポニズム的日本性を強調しながら、新たな「東洋街」として生まれ変わらせようというものであった。ACAL、日系団体、サンパウロ市役所、州政府は、日本を象徴する、赤鳥居、すずらん灯（街灯）、パーペメント（舗道）などを設置、「日本」的民芸品などを販売する（東洋市（日曜市））を設けた。また、日本の文化要素とブラジルの文化要素をブリコラ

ージュした（新たな伝統として、いくつかの「祭り」（花祭り「76年」、餅つき大会「同」、七夕祭り「79年」など）を創造し、リベルダーデ地下鉄駅上のリベルダーデ広場という空間を中心に実施していった。

この時期、リベルダーデ地区の東洋街化はあくまで「日本」というシンボルを通じての（日本人街）化として進められてきたのである。これをここではリベルダーデの第一次（東洋街）化と呼んでおこう。

### 中国街と韓国街が加わった新たな「東洋街」へ

リベルダーデ地区の外国人は何も日本人だけではなく、中国系移民や韓国系移民も存在してきた。中国系移民はすでに60年代末（ないし70年代初頭）には中国食品を販売する商店を開業したり、エスニック団体を結成し、さまざまな活動を行っていた。この中国系移民のエスニック組織化は、特に中国系ニューカマーズが増加しはじめた80年代に活発になり、その多くは本部をコンセレイイロ・フルタード街やグロリア街に構え、中国語をはじめとする中国文化の伝承・普及、相互扶助などの活動を行なってきている。

また、90年代初頭以降、世界のグローバル化やそれと関連するブラジルの輸入自由化政策などを背景に、中国系移民や華僑資本が流入し、ガルボン・ブエノ街やエスツダンテス街で中国系商人たちが日本食品や中国からの輸入製品を販売するようになった。そして、今世紀に入ってから、グロリア街やコンセレイロ・フルタード街にはニユーカマーズたちを視野に入れた大衆的中國レストランが数多く開店してきている。

このようなりベルダーデにおける中国系移民のプレゼンスは、今世紀初頭から非常に可視的なものとなってきた。それは第一に、ブラジル日本文化福祉協会のすぐ近くに現代的な客家会館が建設されたこと、第二に2006年の旧正月からりベルダーデ広場とガルボン・ブエノ街の一部を利用した、初の中国系イベント、春節(Ano Nonvo Chines)が盛大に開催されるようになったことなどに認められる。



りベルダーデ地区では中国系移民の存在感が増してきており、2006年より旧正月には新年を祝う春節が開かれている

近年におけるりベルダーデ地区は、50年代からの「日本」を表象するシンボル、記号などを用いた第一次東洋街化から、中国系移民の増大とそのプレゼンスなどを条件に、日本・中国を表象するシンボル・記号などを選択する第二次東洋街化のプロセスにあるということができる。

そして、07年には、りベルダーデ地区の新たな東洋街化を目指すプロジェクト

クトが発表された。それは第三次東洋街化とも呼ぶうるもので、「東洋」という範疇に新たに韓国を加え、りベルダーデ地区の街路をそれぞれの文化シンボルを用いて中国街、韓国街、そして日本街(日本の場合には江戸と現代日本を表象する街路)とし、それぞれの街路において文化的イベントを実施していくという内容のものである。

すでに述べたように、サンパウロ市(州)の近代的発展は、さまざまな国や地域からの移民たちによって、その一端が担われてきた。りベルダーデ地区は、「東洋」からの移民たちもそのプロセスに参画してきたことを示し、かつ自らのエスニシティを表明する空間であり、別のレヴェルではサンパウロ市の「移民によって構成された都市」(多様性の調和的共生)などを表明する一つの「場」としてある、といえるだろう。しかし、常にオリエンタリズム的に捉えられる「東洋(人)」という範疇の内容と意味は、各エスニック集団の状況の変化やさまざまな他者との交渉などによって、常に更新され創造され続けているのである。